

地理歴史科総合科目の実践と成果

須原 洋次*

I. はじめに

現行の学習指導要領の方向性を定めた中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会社会・地理歴史・公民専門部会、高等学校地理歴史・公民専門部会（2004年から2007年）では、地理歴史科の必修科目のあり方に多様な議論が続出した。その結果、現行の高等学校学習指導要領は、世界史、日本史、地理の学習内容について、それぞれの関連性を一層重視する観点から見直しが図られた¹⁾。しかし、地理歴史科の必修科目と科目構成を改善するには至らなかった。2008年度中央教育審議会教育課程部会の答申では、「なお、地理歴史に関する総合的な科目の設置については、具体的な教育内容のあり方等については、今後さらに検討する必要がある。」²⁾という付帯文を付けて、現行の学習指導要領の枠組みが提示されることとなった。

小稿では、京都府立西乙訓高校が2010年度から3年間、文部科学省研究開発学校の指定を受けて取り組んだ地理歴史科総合科目「世界の風土と文化」について、報告する³⁾とともに、取組の過程で見いだした地理教育の役割や実践上の課題について検討したい。

II. 世界史必修の問題点

2008年1月の中央教育審議会答申を踏まえて、同年、全国普通科高等学校長会が教育課程に関する調査⁴⁾を実施したところ、世界史必修について「大いに評価できる」とした回答は大学進学生徒が多い区分の高校の2%に過ぎず、「問題が多い」あるいは「どちらかという問題がある」とした回答は実に75%に達している。このことは、もちろん、世界史履修が適当ではないことを示しているのではない。地理歴史科3分野のうちの1つを必修とした履修のあり方（第1表）に、教育課程編成上、多くの学校が課題を感じていることに他ならない。

世界史必修は、各高等学校の教育課程をみると、多くの場合、日本史か地理のどちらかを学ばないことを意味する。この点について、第一に学力の問題があげられる。地域に展開するさまざまな事象は、言うまでもなく空間的な要因と時間的な経緯から生じている。したがって、地理歴史科に求められる基礎的・基本的な知識や技能の定着には、世界や地域のさまざまな諸事象について、地理的な要素と歴史的な要素の両面を総合的にアプローチ

* 龍谷大学文学部

キーワード：地理教育、歴史教育、総合科目、高等学校

Key words：Geography Education, History Education, Integrated Subject, High School

第1表 地理歴史科の履修条件

科目	標準単位	履修条件
世界史 A	2	2つの科目のうち少なくとも も1科目を選択して履修
世界史 B	4	
日本史 A	2	4つの科目のうち少なくとも も1科目を選択して履修
日本史 B	4	
地理 A	2	
地理 B	4	

1994年以降に実施の学習指導要領による

する方法を身に付けることが求められる。

第二は、改正教育基本法にも示されたとおり、伝統と文化を学ぶことが重視されているにもかかわらず、地理歴史科でその具体的手立てが十分に触れられていない。伝統と文化を尊重し、またその態度を養うことは、選れて地理歴史科の学習対象たりうるだけでなく、文化を地域的特色と歴史的過程の両面からアプローチする地理歴史科の学習こそが、我が国をはじめ各国各地域の文化の理解、そして自国の文化の発信に大きな役割を果たすと考えられる。第三に、地理歴史科教員の人材育成について指摘しておきたい。世界史必修は、従前の社会科に代わって地理歴史科が誕生した1989年の改訂時に遡る。新しい必修科目「地理総合」が教育課程に登場するのは、2022年とされていることから、世界史必修の形は約28年間継続されることになる。この間、教員の養成、採用、そして学校現場における教科指導力向上のための育成が、バランスよく進められてきたか甚だ疑問である。

地理教育の豊かな専門性は、地図を活用した言語能力や空間的思考力を育成し、多くの教科領域の学力形成に資する内容を具備している。歴史教育を担う関係者はもちろん、教育に関わるあらゆる立場の人々へ地理教育の必要性にかかる効果的な発信が求められる。

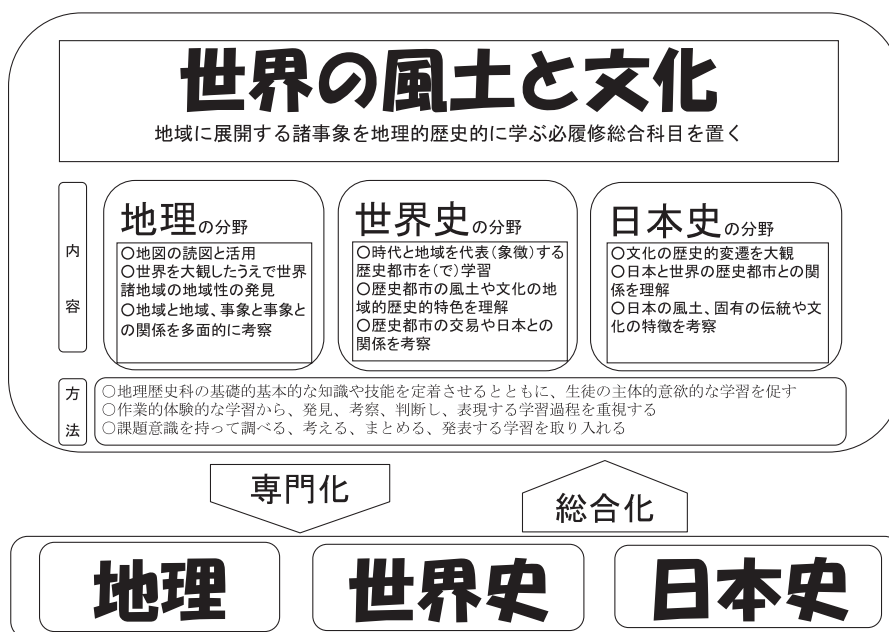
また、歴史教育と地理教育とにおいて学力論の共有化を図り、大学における教員養成カリキュラムの見直しを進めるなど、教育・研究・行政が一体となって改革を進める必要がある。地理歴史科総合科目「世界の風土と文化」は、その具現化に向けた取組の一つである。

知識基盤社会を担う子どもたちの学力は、単に地理や歴史に関する知識の定着を目指すものではなく、グローバルな視点から柔軟な思考力や判断力を培うことが求められている。一部の自治体に見られる日本史必修の動きは、結果として、地理的分野を排除することに繋がる恐れもある。世界史、日本史、地理の何を必修にするかという議論では、「生きる力」を培うことは困難であると考えられる。

III. 地理歴史科総合科目のねらい

(1) ねらい

本取組の第一のねらいは、3つの領域からなる高等学校地理歴史科の履修のあり方を改善することにある。2006年に富山県の高校で発覚し、全国を席卷した未履修問題でも明らかになったとおり、1999年告示の学習指導要領において、週5日制の導入、「総合的な学習の時間」や普通教科「情報」の新設などが、各校の特色に応じた教育課程の編成を困難にしている。本来、ほとんどの普通科高校において世界史、日本史、地理の3領域を履修させていた1981年以前の教育課程のしくみこそ、教養を身に付けるだけでなく、課題を認識し、その解決に向けて探究する学びに必要である。そのために、3つの領域を包摂し、基礎的・基本的な知識や技能を精選した総合科目の設置を検討することが、第二の



第1図 地理歴史科総合科目「世界の風土と文化」の考え方

ねらいである。その考え方は、第1図に示すとおりである。

(2) 科目の名称

世界史、日本史、地理の3領域を総合化して学ぶ科目を、「世界の風土と文化」と呼ぶことにした。「世界」は、日本を含む世界全体を大小多様なスケールからなる地域、国、大陸等の地域的性格や特色を踏まえて学ぶことを意味する。「風土」と「文化」は、文脈や使い方によって、多義的に用いられる。「風土」は、自然環境に近い概念であるが、政治風土や歴史的風土などの用い方もある。「文

化」は、歴史や伝統などを背景に、精神的活動によって作り出されるものであるが、地域的特色との関わりも重要である。どちらも地理的条件や歴史的経緯から考察することが求められる用語である。そのため、本科目の名称に適切と考えた。

(3) 履修の形態

第2表は、総合科目設置を踏まえた地理歴史科科目の履修のあり方を示したものである。この取組は、3つの領域をすべて学ぶことを目指しているため、案Bのとおり、「世界史」「日本史」「地理」を学ぶ場合は、総合

第2表 総合科目の履修条件

科目	標準単位	案A	案B
世界の風土と文化	2	必修	履修しない
世界史	3	3つの科目のうち少なくとも1科目を選択して履修	3つの科目をすべて履修
日本史	3		
地理	3		

科目の履修を要しない。案Aは、総合科目と3領域の一つを選択履修するタイプである。

高等学校は、全日制、定時制、通信制の3つの課程、各課程は普通科、専門学科、総合学科の3学科からなる。とりわけ、専門学科は、職業系のみならず、大学進学や特定の領域に特化した多様な学科からなる。しかも、高等学校卒業に要する最小単位数は、74であることを考慮すると、地理歴史科の履修すべき最小単位数は、4～6であることが求められる。

IV. 地理歴史科総合科目「世界の風土と文化」の内容構成

〈A〉目標

我が国及び世界の諸地域の風土や文化を、地域的特色や歴史的観点から理解させることにより、地理的考察力や歴史的思考力を培い、平和で民主的な日本国民としての自覚と資質を養う。

〈B〉内容

(1) 地図で学ぶ

多様な縮尺の地図を活用し、地図の読み方や地図で表現する基本的な技能を習得させるとともに、位置・分布・配置などに留意して地理的事象について考察させる。

ア 地域を学ぶ

多様な地図を活用し、地域に展開するさまざまな事象のうちいくつかを選択し、地域的特色や歴史的個性について理解する方法を学ぶ。

(ア) 地図を読む

大縮尺の地形図等を活用し、地図から得られる情報を読み取ることをとおして、地図の読み方や地図で表現する方法について理解する。

(イ) 生活圏の地域を学ぶ

学校が位置する市町村の地図を活用し、自然環境、地域の歴史的個性、伝統や文化の特色、産業立地にみる特色などから、地域的個性を読み取る。

(ウ) 国土の地域的個性

主題図を活用していくつかの事象を取り上げ、日本の国土の地域的個性や特色を理解する。

イ テーマ学習Ⅰ 調べ学習 〈世界の国・都市の文化と人々の暮らし〉

世界の主要な国々の位置と名称を確認するとともに、一つの国もしくは都市を選び、文化や人々の生活について調べる。

ウ 世界を大観する

いくつかの主題図を活用して、事象の地域的分布や地域的個性を理解させるとともに、世界の風土や文化を理解する基礎的な知識を習得する。

(ア) 文化を育む自然環境

地図を活用して世界の大地形や気候を概観し、各地域の文化を育んだ風土の地域的特色について理解させる。

(イ) 農耕の起源と伝播

地図を活用して世界の農耕文化を概観し、農牧業の歴史的経緯や今日の食文化の地域的特色について理解させる。

(ウ) 世界の宗教の分布

地図を活用して世界の主要な宗教を概観し、布教の歴史的経緯や分布の地域的特色について理解させる。

(2) 歴史都市に見る文化の歴史的個性 ア テーマ学習Ⅱ 調べ学習 〈古代文明の誕生〉

世界の古代文明を大観し、各生徒がその一つを選択してワークシートにまとめ、古代文

明の地域的歴史的特色について理解させる。

イ 世界の歴史都市

時代や地域を代表させたいいくつかの歴史都市について、その特色や地域との関係について学び、歴史的思考力や地理的な見方考え方を培う。

(ア) 歴史都市で学ぶ世界の風土と文化

学習する歴史都市の時代と地域を概観し、歴史都市で風土や文化を学ぶねらいや学習の内容について理解させる。

(イ) 歴史都市の歴史的・地域的特色

世界の主要な歴史都市の起源や発展、成長の歴史的・地域的特色を学び、都市をとおして地域の風土や文化を理解する方法を学ぶ。

(ウ) 日本の文化の特色

日本固有の伝統や文化について、その特色を風土や世界の諸地域との関係を踏まえて理解させ、保存や継承に向けた態度を培う。

(3) テーマ別探究

ア 歴史的遺産の保護と新しい文化の創造

世界遺産などを例に、文化の保護や継承、新しい文化の創造について、その意義を理解させるとともに、態度を培う。

イ テーマ学習Ⅲ 事例研究〈テーマ別文化研究〉

歴史都市を事例に衣食住などの生活文化、スポーツ、芸術など文化に関わるテーマ別研究に取り組み、地理的な見方考え方や歴史的な思考力を身に付けさせる。

〈C〉内容の取り扱い

(1) 内容の全般にわたって、次の事項に配慮するものとする。

ア 中学校社会科の学習の成果を踏まえ、地理歴史科の基礎的・基本的な知識や技能を定着させるとともに、専門性を追究する科目「世界史」「日本史」「地理」の学習への

興味関心が高まるよう配慮すること。

イ 各単元項目において、それぞれの事象について網羅したり深入りすることなく、時代や地域を大観させながら特色ある事例を適切に選択し、学習内容の精選を十分に図ること。

ウ 世界及び日本の風土と文化を学ぶに当たり、学習のあらゆる項目において可能な限り、地理的な見方や考え方、歴史的な思考力が育成されるよう配慮すること

エ 生徒の作業的・体験的な学習により、調べる、考察する、まとめる、発表するという過程を重視した学習に配慮すること。

オ 文化の事例については、人物や文物を網羅することなく、時代や地域の特色を象徴的にあらわすものを適切に選択するとともに、次の点に留意すること。

(ア) 継承性 ……現代に繋がるもの

(イ) 伝播性 ……交流や融合などを通じて他地域に広がったもの

(ウ) 固有性 ……時代や地域を代表するもの

(エ) 生活文化 ……衣食住の重視。子どもの課題意識の定着を容易にする

(オ) 日本文化との関係性

(2) 内容の取扱いに当たっては、次の事項に配慮するものとする。

ア 内容の(1)のアについては、地図を読み地図で表現するための基本的な技能を身に付けられるよう学習内容の工夫を図ること。

イ 内容の(1)のアの(イ)については、史跡や祭り、産業立地等に着目するなど、位置や自然環境、地域の歴史的・性格、外国を含めた他地域との関係性など地域の特徴が理解できるよう配慮すること。

ウ 内容の(1)のアの(ウ)については、歴史時代を含めたいくつかの地域区分図を

ととして、国土の特徴をはじめ地域区分の意義やねらいを理解することができるよう配慮すること。

エ 内容の(1)のウについては、複数の主題図から分布の特徴や事象の関係性をを読み取ることに留意するとともに、世界的な分野への関連性を重視すること。

オ 内容の(2)のイの(イ)については、時代と地域を代表する世界と日本の歴史都市を適切に選択し、都市の繁栄を事例に地域性歴史性を踏まえた文化の特徴を理解するとともに、都市と国家を含む地域との関係について気付くことができるよう配慮すること。

カ 内容の(2)のイの(ウ)については、日本の文化について、その特徴を自然環境や歴史的経緯、及び外国の影響を踏まえて理解させるとともに、現代の日本の伝統や文化との関連に着目させること。

キ 内容の(3)については、生徒が設定したテーマに基づき歴史的考察と地理的な見方考え方が育成されるよう、調査研究の内容を工夫するとともに、世界史、日本史、及び地理の学習への興味関心が一層や高まるよう配慮すること。

V. 総合科目設置の成果

総合科目実践の各年度末において、生徒アンケートを実施し成果の検証を図った。第3表は、その一部である。

取組の初年度は、第1学年において2クラスが総合科目、3クラスが世界史Aを学習した。2年目、3年目となる2011年度入学生、2012年度入学生は、全員が第1学年に総合科目を学んだ。設問アの「中学生のときに社会科が好きであったか」、設問イの高校1年の履修科目について「面白く興味を持って学習できたか」は、2012年度入学生の数値が低いものの、各年次にほとんど差異がない。特筆すべきことは、第一に2010年度入学生の世界史Aと総合科目との間で、熱心に学習できたと振り返る生徒が、総合科目の履修の方が5ポイント程度高いこと、第二に総合科目を学んだ生徒は、「学んでよかった」と考えている生徒が毎年度、過半数を超えていること、第三は、設問オである。2010年度入学生の2年次は、世界史B、日本史B、地理Bのうち1～2科目を選択することとなっている。その選択した科目を学んだ後、再度、総合科目を振り返って「学んでよかった」と答えた数字が、1年次の56ポイントから2年次に80ポイントになっている。世

第3表 各年次第1学年末のアンケート (%)

入学年次	2010年度		2011年度	2012年度
生徒数	115名	78名	199名	194名
1年次履修科目	世界史A	総合科目	総合科目	総合科目
ア 中学校社会科が好き	73.9	73.1	66.3	...
イ 面白い興味を持てた	69.6	70.5	72.4	58.2
ウ 熱心に学習できた	30.4	35.9	34.7	21.1
エ 総合科目を学びたかった・学んでよかった	24.3	56.4	59.8	54.6
オ 質問エの1年後	59.8	80.0

第4表 2010年度入学生アンケート (%)

履修科目	世界史 A	総合科目
生徒数	115 名	78 名
ア 地理は地域の特色やその原因の考察、地図の見方を習得することが重要	91.4	94.7
イ 歴史は時間的な変化やその原因を学ぶことが重要	85.9	96.1
ウ 地理や歴史は調べ方考え方学び方を学ぶことが重要	73.8	84.2
エ 世界の様々な地域の出来事や文化について関心がある	71.4	71.1
オ 世界の人々の文化について学びたい	64.7	67.1
カ 日本の文化の特色を知るためには世界各地の文化を理解することが必要	75.2	84.2
キ 世界の文化は、気候や他地域との関係など地理的条件によって形成された	79.0	97.4
ク 世界の文化は、歴史的経緯によって形成された	81.9	96.1
ケ 世界の様々な地域の文化は地理と歴史の両面から学ぶことが重要	72.4	89.5

界史 B、日本史 B、地理 B のいずれかを選択履修して、より一層、総合科目の学びが効果があることを、生徒の多くが実感している。地理歴史科の学習に総合科目の履修が少なからぬ役割を果たしていることが伺える。

その他、総合科目履修者は、「地理は地名や位置の知識を得ることだけでなく、地域の特色や地域性格を考察したり、地図の見方を習得することが大切 94.7%」「歴史は事件や人名を知ることだけでなく、時間的な変化やその理由を学ぶことが大切 96.1%」「世界の様々な地域の文化は地理と歴史の両面から学ぶことが重要 89.5%」などが、総合科目を履修しなかった生徒より、高い数値となっていることを付け加えたい (第4表)。

VI. 地理教育の役割と課題

1982年度から学年進行により順次実施された学習指導要領により「現代社会」が登場し、1994年度に始まる学習指導要領では、「世界史」が必修になった。すべての生徒が地理を履修していた状況から、40年以上にわたって高等学校で地理を学ばない生徒が、社会に送り出されることになる。

第5表は、地理歴史科及び公民科の2015年度教科書需要数である。教科書は、必修の世界史と比べて少ないのは当然であるが、日本史よりも明確に少ない。また、第6表は、2015年に実施された地理歴史科の履修状況を示している。現行の学習指導要領で学ぶ高校生の実態を示す貴重な資料であるが、地理を学ばない生徒の比率が47.5%と、半数近くで最も多い。しかも、地理を学んでいる生徒

第5表 教科書需要数とセンター入試受験者数 2014年

	世史 A	世史 B	日史 A	日史 B	地理 A	地理 B
教科書数	917624	451833	436665	539524	415269	275949
教科書%	82.6	40.7	39.3	48.5	37.4	24.8
センター受験者数	1378	84119	2410	155359	1844	146922
センター受験者%	0.4	21.5	0.6	39.5	0.5	37.5

資料：文部科学省、大学入試センター等による

第6表 高等学校における科目の履修状況（2013年度入学者抽出調査）%

	世界史A	世界史B	世界史 AB両方	日本史A	日本史B	日本史 AB両方	日本史 不履修	地理A	地理B	地理 AB両方	地理 不履修
普通科等	66.3	39.8	6.1	25.2	49.0	8.8	34.0	24.2	32.2	4.9	48.7
職業学科	98.3	2.2	0.5	44.0	4.7	0.4	51.6	57.3	2.7	0.6	40.6
総合学科	86.6	18.7	5.2	43.4	29.5	5.4	32.4	33.5	8.2	1.3	59.6
合計	75.8	28.8	4.6	31.3	36.5	6.5	38.2	33.1	23.0	3.6	47.5

普通科等には、理数や外国語に関する学科（職業教育を主とする専門学科以外の専門学科）を含んでいる。A科目、B科目両方履修している生徒は、A科目を履修、B科目を履修のそれぞれでもカウントしている。

資料：国立教育政策研究所等による

は、理系進学コースに在籍していることが多く、文系の生徒は少ない。地理歴史科の学校の教員は、文系の学部で養成されるため、小学校や中学校、高等学校の教員の多くは、中学1年生以来、地理を履修せずに教員に任用されることに問題はな一層深刻である。

また、総合科目の指導計画立案及び授業実践においては、高校の世界史、日本史、地理の担当者として、毎週において喧々諤々の協議を重ねてきた。世界史のみを必修とし、日本史か地理のどちらかを学ばないという教育課程の弊害を払拭し、生徒の学びの立場で地理歴史科の目標を達成する総合科目のあり方について、暗中模索の議論を費やす中で、地理教育の改善すべき点についても、認識するところとなった。

地理学の5大テーマが、地理教育研究に携わる研究者らに紹介された⁵⁾。その成果は、地理教育の実践にも波及することが求められるが、その取組は必ずしも十分とは言えない。地理教育の専門性は、地理的事象の位置や配置、分布、ルート等について、分析的視点に基づいて理解し考察することにある。学習指導要領においても、地理的な見方考え方について、授業でどのように考え、指導すべきであるか明記されている⁶⁾。したがって、事象

や地名の暗記という科目のイメージや指導観を払拭し、課題追究型の学習プロセスを確立するために、学習内容の精選と単元構成の改善が求められる。高等学校は、長い間、系統地理と地誌を柱に、地形、気候、農業、鉱工業、人口、言語、宗教、集落など、多岐にわたる内容を、体系や系統性を重視して網羅的に指導してきた。地理的事象について、分布や配置の特徴を読みとり、その原因や背景を考察する学習のためには、学習内容の大幅な見直しが必要である。

また、歴史を学ぶにあたって、諸事象の背景や要因を時間軸から理解するうえで、地図の活用が不可欠あるいは有効であるものが少なくない。歴史的諸事象を地図から読み取り、地図で表現するための知識やスキルを身に付けることが、歴史的思考力の育成はもちろん、さまざまな空間的事象を扱う他教科他科目においても有用である。地図を活用した言語活動は、地理教育の豊かな専門性と有用性を、教育実践においてよりシンプルにわかりやすく示すことが求められている。

VII. おわりに

総合科目の研究開発に当たっては、世界史、

日本史、地理の3分野をどのように総合化すべきか、それぞれの専門科目との関連性をどのように考えるかなど、科目設置の理念や教育実践上の学習内容の具体化に向けて課題は多い。また、大学等の研究者の方々から、学問的な研究領域とは異なる枠組で設けられる総合科目に、批判や疑問の声も数多くいただいた。しかし、地理学や歴史学を学ぶのではなく、高等学校地理歴史科という教育の領域において、特定の分野のみを必修とした教科構成では、「生きる力」を育てるための役割を果たすに十分とは言えない。

日本学術会議は、世界史未履修問題を契機に、高等学校地理歴史科教育の見直しを検討し、「地理基礎」「歴史基礎」の2つの科目の創設などを内容とする提言を2011年に文部科学省に提出した⁷⁾。その考え方に基づく研究開発が、日本橋女学館高校、神戸大学附属中等教育学校で取り組まれている⁸⁾。その今後の成果についても、期待するところが大きい。

2016年夏に、文部科学省は、次期学習指導要領改訂に向けて、高等学校地理歴史科に「地理総合」と「歴史総合」の2科目を必修とする案を公表した⁹⁾。1994年より実施された世界史必修は、実に約28年ぶりに廃止されるとともに、高校普通科では地理領域の科目が実質約40年ぶりに必修科目となる。

地理教育で身に付ける学力は、世界の諸地域に関する網羅的断片的な知識ではなく、地理的な見方考え方である。地域に展開する多様な事象の位置、分布、距離、ルート等について、規則性や関係性を見出したり、大小さまざまな地域の特徴を明らかにすることが本来の学習のねらいである。その上で、情報を地図で読み取り地図で表現する能力は、地理に限らずあらゆる領域の言語活動、表現活動

に有用である。さらに、防災、ESD（持続可能な開発のための教育）などの今日的課題の解決に、GIS（地理情報システム）を活用した地理教育の成果が期待されている¹⁰⁾。とくに、IGU（国際地理学連合）による「ルツェルン宣言」は、持続可能な社会の構築をめざす価値観・意識の変革とそのために行動する能力を備えた人間の育成を目指すものであり、世界各国で地理教育のグローバル・スタンダードとなりつつある。文部科学省は、「地理総合」をESDとしての科目として位置づけている。

地理教育の意義は、地理でしか学べない専門性と、他の領域で活用される有用性を兼ね備えていることにある。その成果が、急激なグローバル化が進む今日の社会において、いかに発揮され、地理が学校教育に不可欠な役割を担う存在でなければならない。

本研究開発には、研究者、教育行政、学校関係者など、数多くの先生方から貴重な御指導御助言をいただいた。また、大阪大学名誉教授の川北稔先生には、本研究開発の運営指導会議座長として、時代を読み歴史観を育てることや、本研究の方向性などについて、きわめて有益な御指導をいただいた。立命館大学の片平博文先生、京都大学の岩城卓二先生には、地理学、歴史学の立場から地理的なものの見方や考え方、歴史的思考力の育成に関わって、多角的な視点から示唆に富む御教示をいただいた。また、中高接続の観点から、長岡京市立中学校の外田敏久先生、東正彦先生にも有益な助言や御指摘をいただいている。御指導御助言をいただいた関係の諸先生方に、心より感謝と御礼を申し上げたい。

注

- 1) 「高等学校学習指導要領」文部科学省、2008、18-30 頁。
- 2) 中央教育審議会教育課程部会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」(答申)、文部科学省、2008、44 頁。
- 3) 本研究は、須原のほか、京都府立西乙訓高等学校地理歴史科教員(当時)の川上由起(研究主任)、中矢哲司、和田直明、西岸秀文が指導を担当した。
- 4) 全国普通科高等学校長会第 58 回総会研究協議会長崎大会教育課程研究委員会資料、全国普通科高等学校長会、2008、73-78 頁。
- 5) 中山修一「アメリカ合衆国における地理教育復興運動の状況」、人文地理 43、460-478 頁。
- 6) 例えば、高等学校学習指導要領解説「地理歴史編」、文部科学省、2014、83 頁及び 99 頁に地理的な見方考え方について明記されている。
- 7) 「新しい高校地理・歴史教育の創造—グローバル化に対応した時空間認識の育成—」日本学術会議心理学・教育学委員会・史学委員会・地域研究委員会合同高校地理歴史科教育に関する分科会、2011、65 頁。
- 8) 「文部科学省指定研究開発学校高等学校地理歴史科『地理基礎』『歴史基礎』実施報告書」日本橋女学館高等学校、2014、83 頁。「文部科学省指定研究開発学校高等学校地理歴史科『地理基礎』『歴史基礎』実施報告書 Vol. 3」神戸大学附属中等教育学校、2016、53 頁。
- 9) 中央教育審議会教育課程部会教育課程企画特別部会(第 20 回)配付資料「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ(案)」、文部科学省、2016。
- 10) 井田仁康「高等学校『地理』の動向と今後の地理教育の展望」、人文地理 68、2016、66-78 頁。